

# 秋、八丈島を訪ねて

外山 孝司

昨秋、機会があって、八丈島を訪ねた。

旅の直前に図書館で八丈島についての本を探して、手にしたのが乾浩著の『海嘯 逸と富蔵の八丈島』（新人物往来社）。読んでみるとなかなか面白くて、読み終わったのは往路の飛行機の中だった。本の内容については後で触れることにして、まずは八丈島について少し紹介しよう。

## 八丈島の紹介

東京都の南方海上 287km、東山（三原山・標高 701m）と西山（八丈富士・標高 854m）の二つの複式コニーデ火山が接合した裾合いからなるマユ型の火山島で、面積は山手線の内側とほぼ同じだ。



三原山の中腹から八丈富士を望む。八丈富士の左肩にちらっと見えるのが八丈小島。



八丈富士の六合目から上は、町営の放牧場として利用されている。

気候は黒潮の影響を受け、海洋性気候で、年平均気

温は 17.8℃で高温多湿。そのため「常春の島」とも言われるが、年間を通して風が強く、雨が多いので、観光には折りたたみ傘か雨合羽の携帯が必要だ。

戦後、八丈島は観光産業が発達し、1960年代には「日本のハワイ」と呼ばれ、首都圏からの新婚旅行先として人気があったが、本物のハワイが身近になった1970年代以降観光客は減少し、現在に至っている。

## 八丈島の特産品

- ・くさや
- ・明日葉
- ・焼酎

薩摩からの流人・庄右衛門が米が不足して酒が造れない島民たちに、サツマイモから焼酎を造る方法を伝授した。

- ・黄八丈

草木染の絹織物。明治42年に地租が金納に代わるまで貢物として上納が行われていた。

- ・フェニックス・ロベロニー（シンノウヤシ）

## 近藤富蔵の「八丈実記」

さて、富蔵（近藤富蔵）の話だ。

八丈島で泊まったホテルの土産物コーナーの一角に図書が並んでいて、貸し出していた。その図書の中になんと奇遇というか、近藤富蔵の「八丈実記」が並んでいた。目を通してみましたが、その内容の豊富さに驚嘆とするばかりであった。

## 探検家・父重蔵

富蔵は江戸時代後期から明治時代の人物で、旗本近藤重蔵の嫡男として生まれた。寛政10年(1798年)、幕府は日本に接触してきたロシアに脅威を感じ、大勢の役人を蝦夷地の調査に向かわせたが、富蔵の父近藤重蔵は28歳でその先遣隊のリーダーに抜擢され、調査を行う中でエトロフに渡り「大日本恵登呂府」の標柱を建てただけでなく、37歳までの10年間、淡路の商人・高田屋嘉右衛門の協力のもと蝦夷地とエトロフを往来して漁場開発などに力を入れたり、人跡未踏の原生林を切り開いたり、北海道の開発・発展に尽力した。その功績によって、重蔵は「御書物奉行」という役につくことになった。御書物奉行とは「紅葉山文庫」という江戸城内の図書館管理者のことだ。

## 槍ヶ崎事件

父重蔵はこの頃、百姓の塚原半之助から槍ヶ崎台地の土地を買い取り、高さ 15m ほどの人造山を作り、「新富士」と名付けた。その上に上がると本当の富士山ばかりでなく、房総半島の山々までよく見えた。

しかし、これが完成した文政 2 年（1819 年）の初夏、紅葉山文庫の修理をめぐるって俵約家の老中・水野忠邦と意見が対立し、大阪に左遷される。重蔵はこの屋敷の管理を、隣人であり元地主であった半之助に頼んで大阪へ向った。

まもなく半之助は近藤邸との境にあった垣根を取り払い、新富士見物に来る客を相手に茶屋を営み始めた。この新富士は時には大名も見に来るほどで、半之助の茶屋は大繁盛した。そして重蔵が大阪から江戸に戻ってくると、半之助は近藤家の土地も自分のものだと主張しはじめ、ゴロツキを雇って父重蔵を脅し始めた。富蔵は半之助のやり方を見て怒りに燃え、半之助とその妻や母親、子ども計 7 名を殺傷し、その罪から八丈島に流罪の判決が下り、文政 9 年（1826 年）22 歳で八丈島に流された。

## 流人の生活

八丈島に送られてきた流人たちは小屋をそれぞれで作り、そこで暮らすことになる。男たちは健康であれば島民の手伝いをし、身体の弱い者は小屋で草履やわらじを作り、それを島民に食べ物とかえてもらって暮らしをたてた。富蔵も島に着くと、三根村というところに小屋を建てて暮らした。

富蔵は島に渡って間もなく、島の百姓・栄右衛門の娘・逸と結婚した。本来、流人は正式に結婚できなかったが、八丈島は男より女の多い女御島であり、彼女らが島に流されてくる哀れな政治犯の男たちと情を通わせることはごくありふれた話であった。かつて戦国大名だった宇喜多秀家の一族の流人のみは正式な結婚を許されていたが、それ以外の流人はあくまで女の世話になっているだけという体裁だった。だから、八丈島での現地妻のことを、水汲み女と言った。富蔵にとっての逸も水汲み女と言うべきところだったが、逸は宇喜多一族の末裔だったので、富蔵は結婚という体裁をとることができた。

富蔵は正式に学問をしたことはなかったのだが、学問好きな父のそばにいたので、多少知識や学問に対する態度も身につけていたので、島民にすすめられて寺

子屋の真似事をしたり、仏像を彫ったり、文字を刻む必要があるときなどはその仕事を引き受けたりし、島になくはならない人になっていった。

## 「八丈実記」の執筆

富蔵はときに八丈島のことについて、八丈島に生まれた者よりも詳しく知っていることがあった。これを見た代官所の役人は、富蔵に紙と筆を与え、八丈島についての事をいろいろ書かせてみることにした。

そのころ富蔵は、逸との間にできた 11 歳になる息子を亡くし、その子の供養のためにも何か仕事を残しておきたいと思うようになっていたので、本格的に八丈島のあらゆることについて調べ始めた。

とはいえ、富蔵は流人だったので、その生活はいたって貧しいもので、家族で朝から晩まで働くかたわら、隙を見ていろいろな記録を集め、書き残していった。やがて安政 2 年（1855 年）富蔵 51 歳の時、「八丈実記」28 巻を書き上げた。さらにその後いろいろ書き込みを加え、56 歳の頃には、自分の知識にある八丈島のことは書き上げてしまった。これを見た島役人たちは大変感心し、さらに立派なものにしようと、島の旧家に伝わる古文書などを見る機会を作った。そして全 72 巻の「八丈実記」を仕上げ、島の政治・経済・宗教・地理・植生・風俗習慣・教育制度など、八丈島のあらゆる情報をまとめ上げ、「八丈島の百科事典」と呼ぶべき内容になった。

明治になって江戸幕府が倒れ、流罪の制度もなくなり、多くの流人は許されて本土に帰っていった。しかし何故か富蔵にだけ赦免の通知が来なかった。明治 8 年（1875 年）には長く苦勞を共にした妻・逸が亡くなり、娘二人はそれぞれ嫁にゆき、東京へと行ってしまい、富蔵はまったく一人ぼっちになってしまった。

しかし、明治 11 年、東京府の役人が島の視察に来て、まだ許されていない流人のあること、その流人が立派な書物を著したことを知らされ、その本を実際に見て驚いた。そして 72 巻のうち 33 巻を清書して差し出すようにと富蔵に紙と筆を与えた。

明治 13 年、富蔵は清書した八丈実記を東京府に差し出すと同時に、その罪を赦免された。富蔵 76 歳のことであった。

民俗学者の柳田國男は富蔵を「日本における民俗学者の草分け」と評している。